

# 国指定史跡 上神主・茂原官衙遺跡の時代

## 大型の瓦葺倉庫

上神主・茂原官衙遺跡の最大の特徴は、「大型の瓦葺倉庫」の存在です。正倉域のほぼ中央部に建てられたこの建物は、東西31・4m×南北9・0mと非常に大きな建物です。奈良県の東大寺正倉院と大きさはほぼ同じですから、いかに巨大な建物であったかがわかると思います。この建物が特別な意味を持っていることは、大きさからも明らかですが、どのような意味があったのでしょうか？

このような建物は奈良時代の全国の郡役所で見られるわけではなく、東日本、特に下野国（現在の栃木県）、陸奥国（現在の東北地方）、常陸国（現在の茨城県）を中心に存在することがわかっています。文献資料でも、郡役所の正倉に存在する大型建物を「法倉」と呼び、飢饉などの際に、米などの食料を人々に支給するため、特別な倉とされています。「法倉」が瓦葺建物であっても、他の正倉内の建物に、瓦が葺かれることが少ないという事実からも、「法倉」が特別な意味を持っていたことがわかると思えます。わざわざ飢饉に備えるための倉庫を大きくして瓦を葺いたことは、支配の象徴としての意味合いがあったのでしょうか。しかし、上神主・茂原官衙遺跡では「法倉」と断定できない状況もみられます。

例えば、この遺跡の特徴である人名文字瓦の存在です。人名文字瓦については、瓦を作成す

ることを命じられた、郡内の有力者達が作成した証として、記名したと考える説が有力ですが、「法倉」とは違い、特別な性格を持っていたから

こそ、人名文字瓦が葺かれたとも考えられます。また、大型の瓦葺建物が廃絶された時期が、蝦夷征討事業の終了時期と重なることから、軍事的な意味で考える必要もあります。いずれにせよ、この建物の存在は、上神主・茂原官衙遺跡を考えるうえで、重要な鍵となるのです。

現在、上神主・茂原官衙遺跡では今後の活用に向けて、東山道跡や大型瓦葺建物跡周辺の内容確認のための発掘調査を実施しています。なお、11月23日（金）午後1時30分より現地説明会を開催します。また、普段も発掘調査に支障が無い範囲での見学は自由ですので、お気軽にご来訪ください。



瓦葺建物があった場所は1300年がたった今は山林になっています

## た報俳句

原風景棚田毎に稲を刈る

浜野 正男

蜩の声沁み透る路地あたり

柳田 石村

みのり田のうねりを渡る暮の鐘

蓬田 四方

秋茄子やとりそこねたる回り寿司

伊沢 静香

目に見えぬ風と遊ぶや萩の花

濱野 マス子

血圧のほどよき数値秋の旅

阿部 信子

敬老日八十路越ゆるもおかげ様

野沢 花枝

秋気なす大黒柱黒光

上野 キミエ

残る蟬雲天通す底力

武井 ミイ子

帰省して校歌の川に遊びけり

大八木 喜重郎